

学び合い 認め合い 高め合う ～「伝える」活動の充実と「よさ」の自覚～

1 努力点設定の理由

A Iをはじめとする様々な技術の進歩によって社会の在り方が劇的に変わる中、「Society 5.0」時代に対応することができる人材育成を目指す取り組みとして、「G I G Aスクール構想」が始まった。その中核となる「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、令和3年1月の中教審答申において示された、「令和の日本型教育」の実現のための2本の柱ともなっている。令和6年からは、さらなる教育の質の向上を目指した第2期「NEXT G I G A」へと移行し、生成A Iをはじめとする先端技術の利活用が提唱された。これらは、子供たちが豊かな人生を切り拓きよりよく生きていくことや、持続可能な社会の創り手となることを目指したものである。

生成A Iは、創造性の向上や業務の効率化によって、労働力不足を解消する手段の一つとして、様々な分野で活用が進んでいる。生成A Iを適切に、かつ効果的に活用できる能力は、これからの未来を生きる子供たちに必要な能力である。つまり、自らがもつイメージや概念を言語化し、他者に適切に伝える力を身に付けるべきだと考える。

名塚中学校ではこれまで、「学び合う学び」を教育の柱と位置付け、対話的活動を取り入れることで、学びの楽しさの感得と学力の向上を図るとともに、対人関係スキルや自己有用感のさらなる高揚を同時追求してきた。また、令和5年9月に策定された「ナゴヤ学びのコンパス」では、「ゆるやかな協働性の中での自律した学び」や、「多様な人との学び合い」が、重視したい姿として示されている。これらは、これまでに本校が学校努力点の取組を通じて追求してきたものと合致する。

令和7年度は、対話的活動と協働的活動という、他者と関わりながら学びを深める機会を取り入れることで、より多くの生徒が理解を深めながら知識・技能を習得し、高次元の課題に向き合えるようになること、それを通して、学習に対する達成感や充実感を味わえるようになることを目指して教育活動を行ってきた。その結果、授業を通じて「できる喜び」「学ぶ楽しさ」を感じ、学習への意欲が高まっていることや、学校生活の中で「自分の力が発揮できた、役に立った」と実感することができる生徒の割合が増加していることが、学校評価アンケートなどの結果から分かった。その背景として、以下のような要因があると考えた。

- ・ 教え合いの機会があることによって、疑問や不明な点を身近な仲間に気軽に聞けるようになり、学習の初期でのつまづき解消や、学習意欲の向上につながっている。
- ・ 自身の理解や作業工程の意図を言語化して伝えることを通して、教える側の生徒も、学習内容の理解を深めつつ、直接的に「役に立った」という実感をもつことができた。
- ・ 一方で他者との会話を得意としない生徒は、対話的活動や協働的活動に消極的で受け身な姿勢で臨み、「学び合い」で期待する効果を十分に得ることが難しかった。

仲間とともに活動し、その仲間の姿や行動、発言等から気付きを得ることは、「学び合い」の一つの姿であると考え。そこで、本年度の学校努力点では、主題として「学び合い 認め合い 高め合う」を、副題として『伝える』活動の充実と『よさ』の自覚を、それぞれ掲げることとした。他者との関わりの中で承認される経験を通して自尊感情を身に付け、たくましい姿で未来を切り開き、実生活で生きて働く生徒の資質・能力を育てていく。特に、「学び合い」では、互いの考えや過程、コツなどを言葉を介して伝え合う機会をより一層充実させることで、「言語化」の重要性を意識付け、より多くの生徒が理解を深めながら知識・技能を習得し、活用していけるようになることをねらい、ねらいや時期に即した「学び合い」の充実に重点を置くことで、主題に迫りたい。

2 学校努力点達成のための重点項目

(1) 対話的活動や協働を効果的に取り入れた学び合いの確立を目指して

- ① 教科のねらい(本時の目標)に基づいた授業デザイン(評価計画)の作成。
- ② 生徒が既習の知識や考え方を総動員して思考することができる課題づくり。
- ③ 学び合う授業における教師の居方・聴き方・語り方

(2) 教師が学び合う機会の設定 … 各教科部会による研究協議と代表者の授業実践年間2回(2週間程度)の授業参観期間

- ① 「学び合い」を通して、生徒が自分や他者の考え、考えの基となった知識・技能に対して、「よさ」を見出すことができているか。生徒の姿や学んだことを話題にする。
- ② 学び合う授業での教師の役割を学び、普段の授業に生かす。